

南極OB会 会報

No. 18

発行 南極OB会
会長 国分 征
編集 広報委員会

目 次

口絵写真 定着氷域で苦戦する「しらせ」	1
2年連続、昭和基地に接岸できず	2
第54次隊壮行会開催される	2
壮行会講演	
南極の自然現象とその撮影方法 武田康男	4
南極関連情報	
昭和基地に第1便	6
第55次南極地域観測隊長、副隊長の決定	7
第11回「南極の歴史」講話会開催	7
第2次隊の気象観測の思い出 立平良三	7
南極オゾン観測の事始め 清水正義	8
定常気象観測の概要と9次、13次の気象観測	
福谷 博	9
連載「時は巡り」⑨	

白瀬矗南極探検隊長の弟のお孫さん、	
白瀬知和氏との奇しき出会い	10
連載支部便り⑭（北陸支部）	
北陸支部総会と「釜田儀作氏のご子孫を囲む	
会」	12
連載「帰国後の各隊の動き」	
第7次隊の集い	13
21次会、伊勢二見町「五峯庵」で開催	13
第34次隊集合報告	14
第28次南極観測隊出発25周年記念同窓会開	
催の報告	14
会員の広場	
計報	16
南極OB会アーカイブ事業報告	16
広報委員会からのお知らせ	16



定着氷域で苦戦する「しらせ」（国立極地研究所提供）

2年連続、昭和基地に接岸できず

第54次南極観測隊を乗せた観測船「しらせ」は、昭和基地へあと18キロまできたところで厚い氷に阻まれ、1月11日、昭和基地への接岸を断念した。昨年に続いて2年連続で接岸できなかったわけである。

今年の氷状は、厚さ5メートルの海氷に1メートルの積雪があり、海氷の表面には巨大な水たまりが広がっており、去年より一段と条件が悪いという。去年は、ヘリと雪上車で約20キロの距離をピストン輸送したが、今年はどうなるか。

もともと昭和基地のあるリュツォ・ホルム湾は、氷が厚く、接岸が難しいところといわれ、日本隊が最初に基地建設の場所として割り当てられたとき、「進入不能地域」といった名前までついていたほどの場所だった。

ところが、砕氷力も弱い観測船「宗谷」が、第1次観測隊を乗せて1956年暮れから57年1月にかけてそこへ向かうと、すると奥深く入ることができて、昭和基地

が誕生したのである。いま振り返っても、なんと幸運だったことか、とあらためて思う。「宗谷」から「ふじ」「しらせ」「新しらせ」と4代目まで変わって、砕氷力も格段に向上、「しらせ」以降では、昭和基地に接岸できなかった年はたまにあっても、2年連続して接岸できなかったのは今年が初めてである。

しかも、去年、今年と「新しらせ」には大型ヘリコプターが1機しか積んでいないので、物資の輸送に支障が出ることは間違いない。約1000トンの積荷のうち、去年は6割程度しか運べなかったが、今年も観測機材で持ち込めなくなるものが出る恐れもあり、昭和基地で使う燃料も備蓄に頼ることになるかもしれない。

南極の大自然の厳しさは、どんなときでも、決して侮ってはならないということだろう。来年はぜひとも、ヘリコプター2機の予算を期待したい。

(柴田鉄治)



第54次隊壮行会開催される



OB会会長 国分氏挨拶

南極OB会主催の第54次隊壮行会が、2012年11月2日(金)、夕刻より、千代田区一ツ橋の「アラスカ」パレスサイド



司会進行役の牛尾氏

店で開催された。壮行会に先立って、観測隊に役立つ企画として武田康男氏の講演「南極の自然現象とその撮影方法」が行わ

れた。武田氏は第50次で越冬した空の写真家とも呼ばれている先輩であり、美しい写真とその技術に聴衆は魅了された。この講演会の概要は本誌で別途(4ページ)、報告されている。



54次隊観測隊長渡辺氏挨拶

壮行会には総勢100名を超える人たちが集まった。牛尾収輝氏(第49次越冬隊長)により進行し、最初に南極OB会国分征会長の挨拶があり、続いて内藤靖彦氏(21次)の来賓挨拶、渡辺清規氏(3次「宗谷」)の乾杯の発声で懇談に入った。第54次隊は渡辺研太郎隊長(兼夏隊長)以下、夏隊35名、越冬隊30名、同行者32名の総数97名の大多帯である。歓談の後、南極OB会の地方支部から山田知充氏(北海道支部)、横山宏太郎氏、桑原新二氏(新潟支部)の近況報告があった。第53次隊の石沢賢二越冬隊長からの祝電が披露された。54次隊も前次隊と同様、厚い氷と雪で「しらせ」の輸送は困難が予想されるが、両隊が一致協力して切り開いていこうというメッセージであった。53次隊は接岸不能によって輸送が制限され、観測に影響が出た。54次隊ではそれらの観測を優先的に実施することとしているが、氷海航行も厳しいことが予想される。



54次隊越冬隊長橋田氏挨拶

渡辺隊長による隊員紹介と挨拶では、54次隊の観測は「南極地域観測第Ⅷ期の6か年計画」の第3年度の計画として、地球温暖化を中心とした観測、大型大気レーダーをはじめとした重点観測、一般観測について紹介があった。観測は昭和基地周辺ばかりではなく、航空機を利用してセールロンダーネ山地に赴いてベルギー隊と共同で隕石探査を行う他、ドームふじ基地での観測、海鷹丸による海洋観測が行われ、多角的な観測が特徴である。一方、越冬隊長橋田元氏による隊員紹介と挨拶では、一般観測、定常観測の他に南極域中～超高層大気を通して探る地球環境変動の観測等が紹介された。観測隊にとって大変忙しいこの時期に越冬隊30名全員を含む51名が壮行会に来ていただいた。観測隊は11月25日に成田空港を出発し、先に11月11日に出港した「しらせ」乗組員とフリーマントルで合流する。隊員紹介の後、南極OB会会友の鈴木かおりさんから花束贈呈、また同じく会友の絵本画家、関屋敏隆氏から砕氷船「しらせ」の絵が、南極OB会からは、白瀬南極探検隊のドキュメンタリー映像のDVDが贈られた。最後に芳野赳夫氏(3次隊)より越冬生活の安全に関する貴重なお話をいただき、締めとなった。

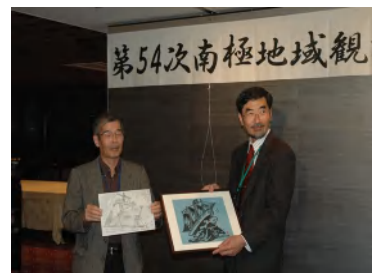
(神田啓史)



観測隊長への花束贈呈



OB会からの記念品贈呈



会友関屋氏からの絵の贈呈



第54次越冬隊員



第54次夏隊員および同行者

壮行会講演

南極の自然現象とその撮影方法

武田 康男（50次越冬）

私は50次越冬隊で、気水圏の研究モニタリング観測を担当し、写真や映像撮影を目的で行ったものではありません。しかし、それまで高校の理科教員をしていたことや、昭和基地からの南極教室が予定されていたので、南極のすばらしい自然を、きれいな写真と映像で知ってもらいたいという思いがありました。

それまで日本や海外で撮影していた経験から、撮影機材や撮影方法について自分なりに準備し、観測業務に支障のない限られた時間だけですが、南極での撮影はそれな

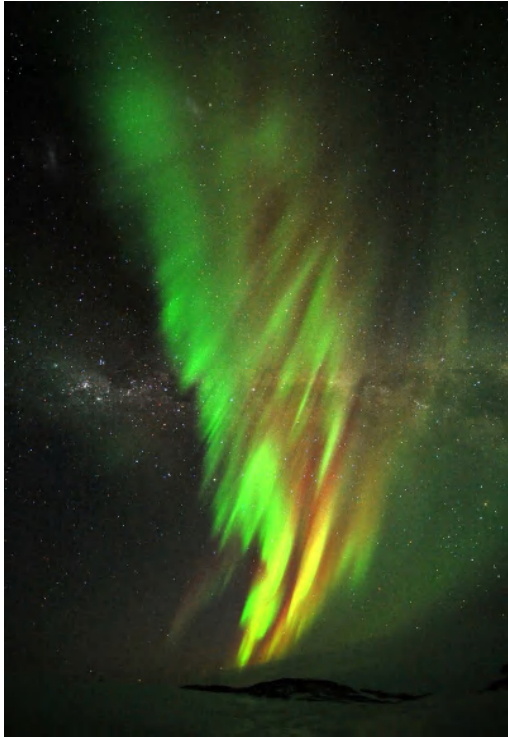
りの成果がありました。事前の準備や、さまざまな自然現象の認識、実際の撮影方法、そして利用方法などについて、私なりの経験をお話しします。これから南極へ行かれる54次隊の皆さんにお役に立てばと思います。

以下の内容について、写真や映像とともにお話ししました。

・ オーロラ

高感度が使えるデジタルカメラ、しっかりした三脚、寒いので新しい（長持ちする）バッテリー、明るい広角レンズ（広角～対

角魚眼) が必要です。写真をインターバル



昭和基地上空のオーロラ

撮影することによって、動画も簡単に作れます。シャッターを開ける時間は、オーロラの動きに合わせてその場で決めなくてはなりません。また、絞りは開放がよいですが、感度はあまり上げすぎない方が色がよいです。オーロラがかなり明るいときは、動画撮影でも簡単に写ります。ここ1、2年に発売された新しいデジタルカメラは、写真も映像もとても写りがよいです。意外とやっかいなのが夜間のピントの合わせ方でしょう。

・天体

太陽は眩しいので、減光フィルター (ND400 など) が必要です。太陽や月の出入りは200～1000mmの望遠レンズがあった方がよいです。星空には広角～魚眼のレンズを用いて、地平線とともに南十字星などを入れるとよいです。また、長時間露光にはACアダプターが必要になりますが、被膜のビニールは寒いと硬くなるので注意しなくてはなりません。グリーンフラッシュは、目で見えても写真では難しく、映像の方がわかりやすいです。それら天体の出入りの時刻や動きは、PCソフト (ステラナビゲータなど) で撮影前にシミュレーションするとよいです。

・気象

蜃気楼は、400～1000mm程度の望遠レンズがあると、大きくてわかりやすい写真になります。そしてインターバルの動画が面白いです。気象に関する各種光学現象は、写したい部分をスポット測光するとよい色が出ます。また、雲の流れやカタバ風の動きも、インターバル撮影すると効果的です。夜光雲はかなり暗いので、天体を撮る方法で行い、連続写真から動画もできます。昭和基地では雨が稀にしか降らないので、屋外にカメラを置いて自動撮影できますが、ブリザードには気を付けたいです。



グリーンフラッシュと四角い太陽



沈まない太陽 (5分毎に撮影)

・雪氷

冰山や棚氷などは、白い色の中にブルー色が微妙に入っているので、ホワイトバランスは太陽光にし、プラスマイナス補正をうまく使って、よい色を出したいです。霜や小さな氷はマクロ機能かマクロレンズが重宝します。また氷は、太陽光の当て方が重要で、それによって輝きやさまざまな色が出てきます。雪結晶はマクロレンズか顕微鏡がないと難しく、夜間は熱の出ないLEDの光を当てるとよいです。また、顕

微鏡やスライドガラスは、撮影前にビニール袋に入れて冷やしておかないといけません。

・動物

動物は動くので、動画がやはりおもしろいです。ペンギンやアザラシは遠くにいるので望遠レンズがあった方がよいです。出かけるときはズーム比の大きなレンズがあると便利です。微生物は顕微鏡（40～200倍）で撮影します。接眼部にコンパクトデジタルカメラを当てても写りますが、カメラアダプターで一眼レフを付けるとよい写真がとれ、動画機能も使えます。

・その他

室内の撮影は、広角レンズとフラッシュがあると便利です。基地内は暗い場所も多いです。タオルやシャボン玉を屋外で凍らせる実験は、映像の方が見る人がわかりやすいです。生活の場面の写真は、その後何に使うかによって、隊員の顔をどこまで出すかを考えたいです。全体に、写真や映像の記録はないよりあった方がよく、それらは皆でHDなど入れて共有したり、写って

いる人にあげたり、お互いに使える環境があるとよいです。

・まとめ

衛星回線をつないだ南極教室は、越冬開始後にすぐに始まるので、映像や写真はどんどん撮っておかないと、前次隊などのものを使うことになってしまいます。また、帰ってきたあとの講演などでも写真や映像が必要になるでしょう。そして、行く前にカメラの操作に慣れておかないと、現地で失敗しかねません。足元に氷や岩が多いので、くれぐれも落下や転倒などに気を付けてください。54次隊の皆さんのすばらしい撮影の成果を期待しています。

以下は、講演に関係した私の著書です。
「世界一空が美しい大陸 南極の図鑑」(草思社) 2010年
「デジタルカメラによる空の写真の撮り方」(誠文堂新光社) 2012年
「南極大陸のふしぎ～雪と氷が広がる地球の果ての大自然～」(誠文堂新光社) 2013年

南極関連情報

昭和基地に第1便



12月19日54次隊の第1便到着

今回も「しらせ」は海氷に阻まれて接岸を諦めることを余儀なくされていますが、昨年12月19日午後、53次隊待望の第1便が飛びました。昨年、2月21日に53次夏隊を乗せたヘリコプターが基地を離

れて以来約10ヶ月ぶりの外界との接触です。初荷は54次渡辺観測隊長、松田「しらせ」艦長から53次の石沢越冬隊長に手渡されました。

第1便には久しぶりの生野菜や生卵、生鮮食品や果物など、さらに家族からの届け物や手紙、補給物資などが含まれていました。1年を過ごした越冬隊員は家族からの手紙を読んだり、トマトや千切りのキャベツなど久々の新鮮な味とフレッシュな食感に感嘆の声を上げました。

一方、53次越冬隊は11月頃から、この日のためにヘリポートの整備や車の整備などをするとともに、54次隊が使う作業場の整備や布団を干したりして受け入れ態勢を整えてきました。冒頭の記事にありますように、1月11日からは本格的空輸が始まり、これから基地が最も忙しく最もにぎやかな1ヵ月半を迎えることになります。ただし、空輸のみの輸送量を心配しながら・・・。

第 55 次南極地域観測隊長、副隊長の決定

平成 24 年 1 月 9 日、第 141 回南極地域観測統合推進本部総会において、第 55 次南極地域観測隊長兼夏隊長に宮岡宏氏、副隊長兼越冬隊長に牛尾収輝氏が決定した。宮岡宏氏は国立極地研究所准教授、磁気圏・電離圏物理学の専門家で第 28、

40、48 次越冬隊を経験、48 次隊では観測隊隊長を務めた。牛尾収輝氏は国立極地研究所准教授、極域海洋学の専門家で第 31、41 次、49 次越冬隊及び、44 次夏隊（専用船観測）を経験、49 次隊では副隊長を務めた。



第 11 回「南極の歴史」講話会

（2012 年 12 月 15 日（土）15:00～17:00 日本大学理工学部）

＝定常気象観測部門＝

2012 年 12 月 15 日 15 時より、日本大学理工学部 8 号館 831 号教室で、第 11 回目の「南極の歴史」講話会が開催された。

南極での観測には、基本観測と研究観測があり、基本観測には定常観測とモニタリング観測がある。通常、南極での観測といえば研究観測が多いのだが、一方、毎日毎時、地道にデータを取り続けている観測がある。それらは気象、電離層、潮汐、地震観測などである。これらの観測は正確な均一のデータを蓄積していくことが重要な責務である。

今回は、これら定常観測の中の気象観測にスポットを当てた。定常気象観測はこれまで気象庁がその責務を負ってきた。国内の気象観測と同じ基準で観測を実施している。歴史的に見ると今回はそのほんの一部を、2 次隊の「宗谷」で参加した立平良三氏、昭和基地再開時、7 次隊で参加した清水正義氏、9 次隊・13 次隊で参加した福谷 博氏に当時の気象観測などについて語っていただいた。

第 2 次隊の気象観測の思い出

立平 良三（2 次隊・宗谷）

56 年前の 1957 年の秋、南極観測船「宗谷」は竹芝栈橋から南極に向けて出港した。筆者は久我雄四郎・田島成昌両先輩とともに船上気象観測の担当として乗り組んだ。越冬隊の気象担当は守田康太郎・清野善兵衛・川口貞男・矢田明の四氏だった。

ここで筆者が記すのは南極観測とはいっても南極海における船上気象観測に限られる。もっとも、第二次南極観測は、「宗谷」が南極海で海水に閉じ込められ、越冬隊を残せなかったことで、昭和基地での気象観測はない。タロとジロなどの樺太犬も昭和基

地に置き去りにせざるを得なかった。

第 2 次観測では、船上気象観測担当者は海上保安庁の航海士として「宗谷」に乗り組んだ。このような体制は観測船が「宗谷」である間は続いた。船上気象観測は、南極海に限らず、東シナ海～インド洋を航海中も 3 時間ごとに一日 8 回実施した。

更に、一日 2 回地上天気図を作成し、風や降水の予想も発表した。風は海水の密集・離散を支配する主要因である。またヘリや航空機の運用にも気象実況および予想は重要である。



講演する立平良三氏

筆者は一日5回の海上気象観測、南半球各気象通報局からの気象放送の受信および天気図記入を担当し、毎日11時から翌1時までの14時間勤務だった。南極海で行動中の約三か月間休みなしの14時間勤務はかなり苦しかった。唯一の息抜きはデリンジャー現象である。無線通信が途絶するので、気象放送受信作業から解放された。

しかし、残念ながら1～2時間程度しか続かなかった。

もちろん筆者の分担だけが過重だったわけではなく、三人で当時の測候所並みの業務をこなしていたわけである。ちなみに久我、田島の両氏は、大戦中に気象担当の海軍士官として軍艦に乗り組んでいた経歴があり、筆者も陸軍関係の学校の生徒だったことがあるので、まだそのムードが残っていたのかも知れない。さらに、命じられてもいないのに500mb 高層天気図まで作成していた。

一時、「宗谷」はこのまま海水に閉じ込められ、船で南極越冬という事態も憂慮されたが、米国の砕氷艦「バートンアイランド号」に曳航され、ようやく氷海を脱した。その途中、曳航用の太い麻綱が切れたことがあって大騒ぎになった。

帰路、シンガポールで偶々「バートンアイランド号」にそっくりのプラモデルを見つけ、お土産に買って帰った。箱には **East wind class Icebreaker** とあった。「バートンアイランド号」はこの class の砕氷艦だったようだ。

南極オゾン観測の事始め（7次隊の気象観測）

清水正義（7次越冬）

第7次観測隊は、昭和基地を恒久的な観測基地として再生させる第1陣であった。基地再開後の気象観測は定常観測と研究観測に分けられ、地上の定常観測は隔測方式と自動処理による省力化、あるいは将来の自動処理化に備えて、「自動気象観測装置（MAMS）」と「自動気象印字装置（MAMP）」を導入し、高層の定常観測には周波数変化式RSⅡ-64型レーウィンゾンデを開発、軽量化した自動追跡型レーウィンゾンデ受信機D55Bを採用した。

気象研究観測はオゾン観測に重点が置かれ、先ず、オゾンモニター（地表付近のオゾン濃度測定用、ベックマン社）を購入。この反応管を参考にして新たにオゾンゾンデが開発され、KC型と命名した。別に開発されていた滴定式のオゾンゾンデはKT型と命名し、両オゾンゾンデ他露点ゾンデ

と輻射ゾンデも用意した。オゾン全量を観測するドブソン型二重分光光度計の整備点検は、高層気象台に任せた。



講演する清水正義氏

第7次南極観測隊は、1965（S40）

11月20日晴海埠頭出航。12月30日定着氷接岸（昭和基地の北50km）、31日現地夕方、基地へ1番機飛ぶ。1966（S41）年1月中、ブリザードなどの天候不良の間を縫ってヘリによる基地への輸送作業。20日基地再開式。22日測風塔（10m）を建て、23日MAMS、MAMP関係を気象棟に搬入。新発電棟発電開始。26日D55B受信機ラック、高層関係の記録器など搬入。28日放球棟の砕氷。29～30日D55Bの自動追跡部設置。

2月1日9時越冬隊成立式。地上観測は00Z（現地時間03時）から観測通報。2・3日気球充填室へ水素発生器搬入、6・9日水素発生器整備。11日レーウィンゾンデ第1号飛揚。

第7次越冬の高層気象観測の特記事項：
①D55B自動追跡型レーウィンゾンデ受信機は、屋外にむき出しのまま使用。②気球用の水素ガスはアンモニアを熱分解して、水素ガスと窒素ガスの混合のまま気球に充填。③水素充填室兼放球棟の隅にアンモニアボンベと加熱分解炉を置いた。定常観測用のゴム気球（600g）は、この水素発生器で充填すると必要浮力を得るまで1時間近くかかり、屋根の開口部が狭いので、特殊ゾンデ用の大型気球（2kg）は、室内で40分ほど水素を入れてから屋外に出

し、さらに60～70分充填を続ける必要があった。

ドブソン型二重分光光度計の整備・観測：2月1～3日ドブソン小屋の屋根修理、関係品を開梱搬入。5日光学くさびとアンプをセット。6～8日検定準備、波長検定、標準ランプ検定などを経て、8日観測開始。

オゾンモニターの整備：2月8日オゾンモニター関係搬入。10日から種々の準備を重ねて、17～19日反応液作り、2月下旬にオゾンモニターを設置したが種々のトラブルが続き、越冬半ばまでトラブルが続き、結局、全く手に負えなかった。

オゾンゾンデによる観測：2月下旬に気象棟前室を特殊ゾンデ点検用に整備し、特にオゾンゾンデの反応管準備に時間がかかった。3月13日の夜、KCゾンデの反応液とカーボン電極を作ったが、同夜から10m/s以上の風が続き18日によりやくおさまった。朝から水素発生器の電源を入れ、9時水素充填開始、10時55分飛揚。受信記録を見ると大成功。

年末までにKCゾンデを45回飛揚した（内28回有効なオゾン鉛直分布取得）KTゾンデは4～7月に5回飛揚したが1回しか成功せず、以後KTゾンデを使用しなかった。特殊ゾンデ全体では3～12月に75回飛揚した。

定常気象観測の概要と9次、13次の気象観測

福谷 博（9、13次越冬）

基地再開以降の昭和基地の気象観測は、定常観測と研究観測に分けられた。研究観測とは短期的にテーマを決めて行う観測であり、定常観測は同一事項について定期的に継続して行う観測である。清水氏の行ったオゾン観測のように初めは研究観測で行ったが、やがて技術や精度が整って定常観測項目となっていく観測も多い。

定常気象観測の歴史的推移については、気象庁発行の「南極気象観測30年史（1989.1.7刊）」およびその後を取りまとめた「南極気象観測50年史（2008.12.10刊）」で詳しく報告されている。特に50年史では年表化されたものが掲載されており一目瞭然である。

これらの書籍は気象庁図書館で閲覧できる。

ここでは定常観測について述べる。定常観測を歴史的経路からだけで見ると、技術的進歩に伴う観測測器や観測方法の変遷としか見えてこない。例えば、1次隊から6次隊では各観測項目について人手をかけて観測記録していたが、7次隊からは隔測・自動処理観測へ移行し、隔測・自動処理観測になった後はその更新・改善の歴史といった具合である。しかし、定常気象観測は、それぞれの地域の気象条件の中で人間の生存のための基礎的な観測である。気象の変動は日々の生活に密着し、気候変動は社会のあり方や生き方に係わっている。その係わり方を見極めていくために、同一

精度の長期的データを得ることが肝要になってくる。



講演する福谷 博氏

現在、定常観測と位置づけられている観測項目は、地上気象観測（気圧・気温・湿度・風向風速・全天日射量・日照時間・積雪の深さ・雲・視程・大気現象）、高層気象観測（気圧・気温・湿度・風向風速）、日射・放射量観測（上向き、下向き放射量・大気混濁度・波長別紫外線域日射量）、オゾン観測（オゾン全量・オゾン鉛直分布）である。

これらのことを下敷きにすると、この講話会の目的に合ったテーマは、各隊次の気象観測がいかなるものであったかをお話するのが最良と考えた。

私が参加した9次隊では、7次隊がレールを敷いた隔測・自動処理観測方法や観測項目が大きく変わることがなかった。9次隊での特記事項はMAMS、MAMPの2号機への更新であった。しかし、設置して電源を入れたとたん定電圧装置のダイオ

ードやトランジスタが破損するなど思いもよらぬことが起こった。充分注意を払っていたが低温による障害であったようだ。高層観測関係では水素発生器の調子がすこぶる悪く、また充填するノズルが不良品であったため気球が炎上するなど大いに手こずった。また、高層気象観測の自動化を目論んで上層の風の計算に計算機（WAC）を導入した。これは記憶媒体に回転ドラムを使用したトランジスタやダイオードで構成された初期の計算機で、三角関数の計算をするだけで大きな金庫ほどの大きさがあった。これもしょっちゅう壊れて観測は手計算で補った。あるとき、全く動かなくなっただけで三人で1ヶ月以上かかった。埃の多さやアースの不良など様々な原因が考えられたし、人為的なミスも重なった。

13次隊での特記事項は、気球の充填棟の移設である。それまでの充填棟は風を背にして建てられていたため、強くなると風が入り口側に回りこんで気球が引き出しにくくなってしまう欠点があった。このことを解消するため移設に当たっては主風向に対し建物の向きを45度程度振って設置した。このおかげで風船は充填棟から引き出しやすくなり、放球時の事故は大分減った。

定常気象観測担当者はこれまで気象庁職員が隊員として派遣されている。越冬隊員の1割～2割を占める人数である。そのようなわけで越冬の生活面での要のとなることが多い。縁の下の力持ちとして今後も継続して欲しい。



連載「時は巡り」⑨

白瀬轟南極探検隊長の弟のお孫さん、

白瀬知和氏との奇しき出会い

深瀬和巳 3次、7次（元共同通信記者）

白瀬知和さんと出会ったのは、昭和30年（1955年）12月、もう58年ほど前のことである。出会ったのは、日本水産の南氷洋捕鯨図南丸船団の冷凍母船宮島丸であった。

今から101年前、1912年1月末、南緯80度05分に日本南極探検隊は到達した。その探検隊の隊長白瀬矗中尉の弟、知行さんの孫が知和さんである。白瀬中尉から見れば知和さんは従孫であり、知和さんから言えば白瀬中尉は祖父の兄、従祖父・大伯父（おおおじ）という間柄である。

昭和30年は南極観測の事始め

昭和30年という年は、日本の南極事業事始めの重要な年である。この時期に南極の先駆者白瀬中尉ゆかりの方と出会ったことに、南極との縁を感じ、今に至っている。

この年、日本学術会議はIGY（国際地球観測年）の一環として南極観測に参加することを決め、9月にブリュッセルで開催されたIGYの南極会議で参加が認められ、観測地点はプリンスハラルド海岸となったのであった。

これを受けて学術会議は政府に対し南極観測への具体的措置を要請、11月4日の閣議で南極観測参加を正式に決め、南極地域観測統合推進本部を文部省に置くことにした。

輸送担当は海上保安庁で、灯台補給船「宗谷」を改装して使用することになり、隊長候補は永田武東大教授、船長候補は松本満次海上保安官など主要人事も内定、第1次隊（予備観測隊）の出発は翌31年秋と、事態は急速に動き始めた。

国内の南極への関心は急速に高まり、主要新聞社（テレビはまだ黎明期）は、一刻も早く南極地域からのレポートを読者に届けようと動き始めた。

その方法の一つは、米国の艦船や航空機に便乗して南極へ向かうことであった。共同通信はワシントン支局員を米艦イースト・ウッド号に乗せてマクマードへ急がせた。

もう一つは当時盛んだった南氷洋捕鯨の船に便乗し、南極大陸を遠望し、未知の世界の魅力を伝えることであった。

「宗谷」の幹部に内定した人も、捕鯨船団で事前調査をすることになった。松本満次船長は大洋漁業の錦城丸船団の第3天洋丸で12月10日横須賀出港、重松達雄機関長と山本順一航海長は、日本水産図南丸船団宮島丸で12月8日に大阪港を出港することになった。

私は当時社会部兼科学班（まだ科学部はなかった）勤務だった。前年3月米ビキニ環礁水爆実験による第五福竜丸事件が起き、

放射能など科学報道が重要になり、そこにIGY関係の取材も加わり、南極観測も大きなテーマになっていた。



「南極探検隊長白瀬中尉像」の前に立つ白瀬知和さん（浄蓮寺境内）

突然「南極に行け」

12月6日（火）の朝、私は社会部の宿直明けだった。映画でも見ようかと抜け出す機会を狙っていた私を、社会部長が呼んだ。

「あさって大阪港を出る日水の宮島丸に乗って南極に行ってくれ。この船には「宗谷」の機関長と航海長が乗って南極の事前調査に行くことになっている。この二人に同行して南極の見聞を報じること、また捕鯨のルポを書くこと、いいな」と命じた。

驚いている私に「準備を急げ。今夜の寝台車で大阪に行き、あす中に出国手続きを済ますように」。——こうして2日後の8日午前11時、北風の強い、快晴の大阪港を船出したのだった。そしてこの船に白瀬知和さんが乗っていた。

少年の頃中尉から南極の話を聞く

知和さんは当時24歳。北海道大学水産学部を卒業、特別専攻科実習生として北洋の「サケマス漁」「カレイ漁」の2航海の後、念願叶って冷凍母船宮島丸の実習生として南氷洋に向かうところだった。

白瀬中尉は秋田県由利郡金浦（このうら）町（今は“にかほ市”）の真宗大谷派法壽山浄蓮寺第13代住職知道の長男として生まれた。幼名は知教（のち『轟』と改名）、北極探検のため家督を弟の知行に譲っている。

船内で話を聞いたが、知和さんが育った浄蓮寺には、中尉が南極研究に使った参考書やパスポートなどが残されていたし、当時の金浦小学校には中尉の写真が飾ってあったそうだ。

昭和20年夏から翌年まで、疎開のため中尉夫妻が浄蓮寺に滞在した。84歳だったが矍鑠たるもので、南極の話をしてくれたという。少年だった知和君の胸に南極への憧れが芽生え、北大水産学部に進学したのだった。

「将来は南氷洋に関係のある仕事に就きたい。機会があれば南極に行きたい」とも語っていた。そうした話を聞いた私は「故中尉の遺志継ぐ白瀬君」という記事を社会部に送った。

この航海では、「宗谷」の幹部二人に同行して船を何度も乗り換え、浮氷帯に入り氷の怖さを体験し、大陸を遠望して壮大な南極の魅力を知り、感激の日々であった。見聞するもの総てが記事になった。捕鯨のルポではキャッチャーボートに乗せてもらっ

た。

二人は「随伴船が必要」と感じておられ、私はまとめ記事の中で特にこの点を重視して書いた。松本船長も同意見だったようで、第1次で東京水産大学（現東京海洋大学）の「海鷹丸」がその役目を果たした。

翌34年3月31日神戸港入港。知和さんとは再会を約して別れた。

17代住職に

知和さんはその後中東とを結ぶタンカーの乗組員をしながら南極への夢の実現を考えておられた。結局父16代知燈氏が亡くなり昭和59年に浄蓮寺の第17代住職に就かれた。400年にわたる浄蓮寺の法燈を守ると共に大伯父・白瀬轟の遺品や資料を保存、一般にも公開するなどの貢献をされた。一昨年引退して、息子さんとお孫さんに法務を譲られたそうだ。今年4月で82歳。

この記事に添える最近の写真の提供をお願いした。写真と共に「この度の百周年記念事業は成功裡に終わりまして誠に喜びにたえない次第です」とのメッセージを頂いた。

（妹の白瀬京子さんは、白瀬轟の本「雪原（ゆきはら）へゆくーわたしの白瀬轟ー」を昭和61（1986）年に出版している。またヨットの名手で南回りの世界一周を計画、南米の南端の魔の海マゼラン海峡を通過する快挙を成し遂げている。平成2年4月12日に56歳で亡くなられた）



連載 支部便り⑭（北陸支部）

北陸支部総会と「釜田儀作氏のご子孫を囲む会」

岩坂泰信（24次越冬）

北陸支部では、去る8月23日石川県小松市のJR小松駅一画の中華レストランで、北陸支部総会を開きました。9月からの支部の新体制が決まり、新支部長に川田邦夫氏が就くことになりました。人事案件の終

了後、当日の最大の行事である「釜田儀作氏のご子孫を囲む会」がもたれました。

名古屋の大治町から参加された釜田健二氏は、儀作の代から見ると3代後のご子孫ということになります。この釜田儀作氏な

る人物は、開南丸の乗組員として参加した石川県ゆかりの人物であり、北陸支部としては開南丸の船長である野村直吉氏とともに強い関心を寄せてきた人物であります。大方の予想通り、釜田儀作氏もまた北前船に乗り組んでいたと思われ、釜田健二氏が幼少のころを過ごした場所は北前船の船着場の一つとして知られている安宅でありました。氏の記憶によれば、「一族の間では北前船を2艘所有して明治の中ごろまでは大

いに栄えていたと伝えられている」とのことでした。

食事の後、釜田健二氏を先頭にかつて釜田家があったと思われる梯川の河口付近を会員一同で散策し、北前船交易で栄えた往時をしのびました。川を挟んだ対岸は安宅の関があった場所と伝えられているところです。北陸支部では、引き続き北前船文化と白瀬南極探検隊との関係を調べてゆく予定です。



連載「帰国後の各隊の動き」

第7次隊の集い

2012年10月、東京千駄ヶ谷で7次隊OBの集いが行われた。7次隊の集まりは、これまでも東京で不定期に開かれていたが、2006年9月以来6年ぶりであった。前は、オブザーバーを含めた夏隊11名、越冬隊9名、ふじ関連3名と23名の参加があったが、今回は夏隊5名、越冬隊8名と、越冬隊の参加者数はほとんど変わっていないが、夏隊参加者数の半減と、50年に近い年月の経過を感じさせる参加者数となった。

参加者最高年齢は87歳、越冬から帰国後初めて参加の越冬隊OBもあり、46年ぶりの再会に昔話に花が咲いた。年月のたつのは速いもので、1965年11月、新造の「ふじ」に乗船出発して以来47年、あと3年で昭和基地再会から半世紀になる。



集合した7次隊の面々

3年後には、50年の区切りとして必ず集まろうという提案には、毎年やれということで来年の再会を期して散会した。
(国分 征)

21次会、伊勢二見町「五峯庵」で開催される



全員集合写真（写真前列中央が五味貞介夫妻）

21次隊が南極に向け出発したのが1979（昭和54）年です。21次OBの会は、間欠的に開かれていたのですが、ここ数年は平成21年の21次隊出発30周年を記念した沖縄での会を皮切りに、平成22年稚内、平成23年山形と、隊員ゆかりの地で毎年開催しています。

平成24年は、11月17日に三重県の二見町「五峯庵」に集合しました。会場の五峯庵は、21次隊の調理担当で活躍され

た五味貞介さんが10年前に一日一組の店としてスタートしましたが、平成24年11月末をもってお店をお閉めになるということをお聞きし、急きょ設定しました。五峯庵は南極OBの方をはじめ関係の多くの

方々が訪問されていて料理の内容については改めて紹介しませんが、当日は、五味さんご夫婦の心のこもった料理に美味しい酒で大変盛り上がりしました。（松原廣司）

第34次隊集合報告

（隊長退職祝の会）

第34次観測隊隊長、佐藤夏雄氏が平成24年3月をもって、極地研究所を退職なさいました。明るく愉快な隊である「JARE34」らしくお祝いをしようと、今回は浅草を出航し、東京湾を屋形船で巡る大宴会と相成りました。会が開催された平成24年5月19日は、奇しくも「浅草三社祭」と重なり、街全体が隊長のご退職を祝っているようでした。

夕闇迫る駒形橋に懐かしい面々が集まり、その数28名の有志でまずは東京スカイツリーをバックに記念写真を撮影した後、乗船となりました。東京湾が夕陽で赤く染まる頃には、杯は進み、直近で観測隊に参加した、桑原新二隊員（51次越冬隊）、澤柿教伸隊員（53次夏隊）からの南極近況報告に、一同は遠く南の極地に思いを馳せておりました。

東京湾の美しい夜景の中、船はお台場付近に停泊し、晴海埠頭、34次隊出港時にはまだ建設中であったレインボーブリッジを眺めながら、20年前の出港時を思い起

こしました。会も終盤、記念品贈呈・佐藤隊長から謝辞が述べられ、出港当時と変わらぬお元気さに、万雷の拍手が贈られました。



第34次観測隊長の退職を祝う会

楽しい時間が過ぎるのは早いもので、美酒に酔ったのか、久々の船に酔ったのか、強者JARE34の面々は、三社祭に華やぐ浅草の街に千鳥足で消えていったとき・・・
リポート：34次隊 浅香隆二隊員（庶務）

第28次南極観測隊 出発25周年記念同窓会開催の報告

1987年11月晴海を出港して25周年になる今年の9月29日に同窓会の機会を得ましたので報告いたします。2011年3月の東日本震災や神戸・新潟の震災で皆さんがどの様に過ごされているのかが気になり、南極OB会から情報を貰い連絡を取合いました。星合隊長および大山昭和越冬隊長・鮎川あすか初越冬隊長に同窓会開催の提案をし、56名中38名の参加を得ました。

当日は台風17号の影響で遠方から来られる方々の交通事情が心配でしたが、参集者は、尖閣諸島へ急遽派遣の伊禮さん以外の37名でした。

11時に極地研に14名が集合し南極・北極科学館を見学しました。お互い会う度に握手を行い、外見の変わり様は様々でしたが当時を思い出しながら懇談しました。

館内案内は極地研の宮岡宏さん、国文学研究資料館の酒井量基さんをお願いしました。2012年9月昭和基地に現れた赤い

オーロラをプラネタリウムで放映していたので、編集者の宮岡さんの解説で楽しみました。フラッシュをたいて撮影する方もいて皆さんで笑いこけていました。極地研倉庫は、板橋当時よりはるかに広く、輸送はコンテナでしたがダンボールは当時と同じで、装備品を見て話は盛り上がりました。



同窓会参加者

会場には15時過ぎに着き、星合隊長始め数人の方が既に到着しておられ、当時の面影を十分残した容姿で名前やあだ名で呼び合い元気な様子を確認しました。その後順次会場に集合し、16時に記念撮影となりましたが、稲森さん、高部さんは撮影に間に合いませんでした。



会場のスナップ



いよいよ宴会開始となると意外と静かになるもので、星合隊長より「25周年目のよき日に皆さんとここに同窓会を行えることは嬉しく、楽しみましょう」と挨拶を静かに拝聴しました。当日の気温は30℃と暑いので、早めに山内極地研副所長に乾杯の音頭をとって貰いました。これ以降静か

になる事はありませんでした。また、大山越冬隊長と鮎川越冬隊長から挨拶を貰いました。

その後当時の写真を酒井量基さんから借りて、晴海出港から越冬中、第29次との



引継ぎや村山雅美極点旅行隊長・作家高橋三千綱さん・森永由紀さん等の思い出を紹介しました。また、第53次

石沢越冬隊長より氷上輸送の絵手紙を同窓会に送ってもらい紹介しました。

会場は立食形式で、数名毎に記念撮影後に近況を報告して貰いました。夏隊参加の8/15名、あすか6/8名、昭和23/39名の順番で行いました。

夏隊の道田さん、窪寺さん、田中さん、福田さん、高橋祐さん、小山内さん、宮下さんから挨拶を貰い、何度か南極にいかれた事やテレビ取材様子・震災時の様子を話されました。あすかは鮎川越冬隊長、酒井量基さん、野崎さん、大坂さんからは近況の報告、高橋さんは「熱海の夜」と高木さんは「あすか越冬賛歌ダ・カーポ宗谷岬」を披露しました。

昭和基地参加者からも挨拶を貰いました。とにかく元気でした。

19時に最年少参加者の斉藤さんにより、一本締めを行い同窓会は終了しました。

20時まで懇親を深め、品川駅前に移動して懐かしいポップ割り飲みながら話は尽きませんでした。

今回の同窓会開催にあたり南極OB会や南極経験者諸先輩の方々より良きアドバイスをいただき感謝しております。

震災他で心配していた同窓会の方々の元気な様子を報告でき「また会いましょう」の声も有りました。同じ釜の飯を食した若き日々の思い出を語れる機会を計画し、今回参加できなかった方々とも懇親を深めたいと考えています。

(第28次 機械 馬場廣明)





訃報

中山彌助 2012.12.1「宗谷」1,2,3 次 97 歳 | 田中信也 2012.12.26 21 次越冬超高層 58 歳

南極OB会アーカイブ事業報告

南極OB会は元観測隊員が保管していた隊運営資料、生活一般資料、観測・設営機材、装備・衣料品、記録ノート、スライド、写真、グッズ等を常時、受け入れています。現在までに以下の様な貴重なアーカイブズ資料が届いていますのでご報告いたします。資料の受け入れについては南極OB会事務局にお気軽にご相談ください。

これまでOB会で受け入れたアーカイブ資料

雪上車 (KD601) 訓練資料 (11 次)、雪上車 (KC20-3) ナンバープレート (11 次)、極点旅行記録写真 (9 次)、みずほ基地銘板 (11 次)、ミッドウインター祭資料 (15 次)、レコード (14 次)、カセットテープ目録 (15 次)、記録写真 (3、11、31 次)、越冬日誌 (11 次)、越冬資料 (15、33～35 次)、新聞記事、研究会資料、旗、バッジ、ネクタイピン、DVD、故村山雅美氏資料 18 梱等。

*** 広報委員会からのお知らせ ***

○ 2012年度の通信費の振込みを、よろしくお願い申し上げます。

南極OB会の運営は毎年集めさせていただいております通信費に支えられています。今回、2012年度の通信費の振込みが済んでいない方は振込用紙が同封されています。忘れずに振り込んでください。1年分が3000円です。お問い合わせは下記の南極OB会事務局まで電話、Fax、メールでお願いします。

○ 第12回歴史講話会のお知らせ

来る3月30日(土)14時より日大理工学部1号館で開催します。星合孝男氏による「八次越冬一思 い出すままに」、他(未定)を予定しています。一般公開ですので振るってご参加下さい。詳細な案内は後日行います。

○ OB会ホームページのご案内

南極OB会ホームページをご利用いただいているでしょうか? 下記に標記のホームページアドレスを一度クリックしてみてください。OB会に関するニュースをはじめご案内やご連絡事項が掲載されています。また、関連部外とのリンクも張っています。さらに、各隊次のホームページおよび南極関係者が個人的に開いているホームページにもリンクしています。

南極OB会事務局 〒101-0065 東京都千代田区西神田2-3-2 牧ビル301

電話 : 03-5210-2252 FAX : 03-5275-1635

E-Mail Address : nankyoku-ob@mbp.nifty.com

南極OB会ホームページ : <http://www.jare.org/>
